
the silver moon by the sun.

短編集（エロばっか）

紅月 聖夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLEACH / It longs for the
ver moon by the sun .

エロばっか
短編集

【Nコード】

N3833Y

【作者名】

紅月 聖夜

【あらすじ】

藍染が死神達を裏切って、早数カ月。

崩玉を最大の武器に、破面達は死神達を嘲笑う。

その破面の中に、数字を持たない破面がいた。

その力は究極にして絶対。その破面は争いを好まぬ優しい性格であった。

明るい太陽は、虚圏の光。

月しか昇らぬ虚圏の住人にとってそれはあまりに眩しすぎる存在であつた。

銀色の月は太陽に焦がれる。

にじファンで書いているBLEACH小説の短編集^{エロ}です。

にじファンで書いてる小説の主人公設定

主人公

名前：亜虹 朔夜（アシエル サクヤ）

性別：女

数字：無し

階級：十刃以上（藍染や市丸ギンと同階級）

司る死の形：不明

詳細：金と銀の中間色の髪に紅と蒼のオッドアイを持つ。昔両親に殺され、その強大な恨みに反応した虚圏に引きずり込まれた。

人間として生まれた頃から霊力が非常に高く、破面となった今では霊圧は昔の数十倍にまで跳ね上がっている。

実力は十刃を超越し、唯一藍染に太刀打ちできる虚として『最強』の称号を掲げている。

鋼皮はノイトラを超える硬さを誇る。また響転は夜一が目で追いきれないほどのスピードを誇り、元柳斎は目で追えても反応できなかった。

また流刃若火の炎を喰らってもほんの軽傷しか負わないなど、耐久力の謎は藍染にも解明されていない。

しかし戦闘能力が突出して秀でているのと反対に回復能力は遙かに弱い。自然回復を待つしかないが、そのスピードは人間より少し速いだけ。

この戦闘能力の高さは十刃で到底納まりきれず、数字を持たせても

彼女を超える者がいないことから数字を外された。

未知数な部分が多いが年齢は他の虚達よりも遥かに若く（人間ではお姉さんな歳）、からかわれたりすると年相応の反応を見せる。

ただし低身長なことにかなりコンプレックスを持っており、『チビ』は禁句、問答無用で虚弾を撃ってくるので危険。

無邪気な性格で一度興味を持ったものには飽きるまでのめり込むが、それまでと判断し次第切り捨てる非情で冷酷な部分も。

しかし仲間の十刃や藍染、市丸には家族としての愛情を注いでいる。最近藍染のウザさにうんざりしている。思春期なう。

悪戯が好きで、反応の面白いノイトラやグリムジョーを弄ってはリアル鬼ごっこを始める。最近はウルキオラに懐いている。

死神である黒崎一護に興味を持っている。

帰刃：「闇王ノ王冠^{テネブラエ}」、解号は「輝け『闇王ノ王冠』」。

光と影を操る帰刃。王という名のつく能力故、所持者に絶対の支配力を置く。

まるで所持者は我の手駒^{イクサ}、とでも言うかのように手首と首に漆黒の鎖と枷がはめられている。曰く『これは能力の制御装置』らしい。

ウルキオラと同じく第二開放が可能だが、過去に一度第二開放で放たれる霊圧が巨大すぎて暴走し、虚圏が半分吹き飛んだことからそれ以来一度も第二開放を行っていない。

一段階開放では形状が柄の方が面積の広い、細い槍のようになる。柄の先は大きな石突のようになり、それで刺したりする。

虚閃：自分の霊圧と大気の霊圧を練り込み、そこに「闇王ノ王冠」の霊圧を混ぜた独特な虚閃を指から放つ。色は黒。

斬魄刀：「嘆月」、卍解解号は「滅べ」「吟翡翠嘆月」。

一護と同じく常時開放型斬魄刀。普段は霊圧の一部に溶け込ませて身体に封印してある。

しかし卍解時は刀の形状ではなく、所持者と完全一体化する。(一護の「最後の月牙天衝」で一護自身が月牙になるのと同じ原理)能力は本人にも良く分かっているらしいが、今までの経験から「自分が「消したい」と思ったものを「消滅」させる能力」らしい。そんな強大な力故体力の消耗も激しく、回復能力がほぼ無い朔夜では、使用後の戦闘完全復帰に丸一日はかかるらしい。

心の在り処 〈ウル×朔〉

夢を見た。

紅い、赤い、花のように飛び散った水。

その中心で事切れている者を見る。それは、朔夜を絶望を奈落に突き落とすには十分すぎた。

黒髪。翡翠の瞳。白い細身の身体。

地面に力なく投げ出されたその手足の持ち主。

朔夜は顔を覆って、耳を塞いで、叫ぶ。

「ウルキオラ……ッ!」

掌に強い握力を感じて、朔夜は目を覚ました。

汗の流れる身体と、忙しく活動する呼吸、絶えず跳ね上がる心臓。

困惑と恐怖に満ちた瞳を動かせば、夢で見た黒髪の青年が朔夜の掌を握ってこちらを見ていたのが目に入った。

「……ッ…ウ、ル……」

か細い声に応えるように、青年…ウルキオラは握り締める力を強くした。

無表情なのに変わりはないが、瞳の奥に困惑が滲み出ている。

握る力が強くて少し痛い、それほどまで心配してくれていたのだと思うと嬉しかった。

するとウルキオラは手を解き、朔夜の胸元に手を当てた。

人ではない、鋼皮イェロの硬度をもつ冷たい感触が服越しに伝わってくる。

「……?どうしたの」

「…………お前の『心』は、ここにあるのか?」

突然の質問に、朔夜は一瞬戸惑った。

「お前が泣き、怒り、笑い、それらの感情はすべてここから来ているのか?」

俺にはお前の持つ『心臓』も、鼓動も、心もない…ならば、その心はどこにある?」

「ウルキオラに、ちゃんと心はあるよ」

きつぱりと言い切った朔夜に、ウルキオラは目を少し見開いた。

冷たい彼の手に自分の暖かい手を重ね、より強く胸に押し当てて、もう片方の手でウルキオラの身体を引き寄せた。

二人分の体重に、朔夜が寝ていたベッドが軋む。

「心のことを疑問に思うんだから、ウルキオラに心はあるよ。だけど、ここにあるとは限らない。俺だって心は何なのかわかんないし」

そう言うと、朔夜は自分の身体をウルキオラの身体に更に押し当てる。

鋼皮越しに、彼女の鼓動を感じた。トクン、トクン、と一定のリズムで動いている。

「分かる?俺の鼓動が、俺の温もりが……これが俺の心だよ」

「…たとえば、それが作られたものであつたとしてもか」

「うん。だって…作られたものでも、自分から生み出したものでも、『生きてる』んだから。」

だからウルキオラの持つ心は、偽物でもまがい物でもない。………
本物なんだ」

「…そうか」

そう呟くと、ウルキオラは重なつた手をやんわりと振り解き、その手を朔夜の背にまわし、抱きしめた。

「……ならば、これは俺の心だ。」

「…ウル、キオラ……」

ウルキオラの行動、言葉に、朔夜は自分の心が絡めとられる感じがした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3833y/>

BLEACH / It longs for the silver moon by the sun. 短編集（エロばっか）

2011年11月9日23時08分発行